

オジヨジヨコについての1 2章

mlchild

笑いによって人間が他の動物から区別される

—アリストテレス

第一章 博士の罨

水際鉄兵は、え、と頓狂な声を挙げた。空から怪電波を受信したようだった。彼は右手の小指で耳の穴をかつぽじった。何ヶ月も耳掃除をしていない耳の穴からは黄色い耳くそと白いウサギのような毛がとれた。多少聞こえは良くなったが、博士の言葉は変わらなかった。

「オジョジョコを探しに行く」^{りくちやま}陸地山博士はそういって、海泡石のパイプに節くれ立った親指で煙草を詰め、マッチを擦った。

「オジョジョコ、ですか」水際はおずおずと尋ね返した。

「オジョジョコだ」ぷかぷかと煙を吐きながら、博士は繰り返す。

水際はT大学の理学部生物学科4年生だ。普段なら同人誌あさりに秋葉原へ繰り出しているはずの彼がなぜ大学の研究室にいるかという、答えは簡単である。生物学概論Ⅱの単位を落としたのだ。入念に山を張って、入念に鉛筆を転がしたはずだったが、陸地山の作った論述問題、「宍道湖の海藻および貝類のサステナビリティについて二千字で述べよ」には手が出なかったのだ。

必修単位だから、当然落とすと留年である。某製薬メーカーに就職が内定していたのに、これでは立つ瀬がない。親が泣く。弟が笑う。彼女はいない。

この学校には追試という制度がない。なぜか。学校側が学生のふしだらに厳しい態度を取っているわけでもない。水際のように追いつめられた学生が、教授連に「甘い汁」を吸わせることで、薄給で教授をこき使う学校の経営が成り立っているのである。だから教授は試験にわざと難しい問題を選ぶ。もちろんそのハードルをクリアする優等生も中にはいるが、優等生は学校に残り研究の道を歩み、今度は「甘い汁」を吸う側に回る。

だがほとんどの学生は四年間の中に一度は教授に「甘い汁」を吸わせる。この大学の卒業生の大半は社会に出て誰かに「甘い汁」を吸わせて日々の糧を得ていくことになるのだから、ある意味良い社会勉強だ。

「甘い汁」にもいろいろと種類がある。金を出せる学生はまだ良い。出せない学生はどうするか。そこに学生の個性が表れる。お色気で迫る女子学生はお約束として、家宝の掛け軸を持参する者、怪しげな白い粉をハترون紙に包んで持ってくる者、水子がたたっているのでお払いしましょうと言う者、様々である。

水際はこの日、同人誌の世界でも滅多にお目にかかれぬ、星月夜聖弥の「教えて（ハート）ヒゲ面先生」を泣く泣く持参して、陸地山の研究室を訪れたのだった。最もこのくだらないエロ漫画を彼はもう一冊持っていたのだが。

だが陸地山に彼の趣味は理解できなかつたらしい。彼がおずおずと名残惜しそうに差し出した二色刷の漫画本に目もくれず、陸地山は言ったのだ。オジョジョコを探す、と。

「先生」といささか動揺しながら水際は言った。

「オジョジョコって何ですか？」

陸地山はパイプを吹かすのをいったんやめ、長くのびた白い眉毛を八の字に垂らし、黒目がちのつぶらな瞳をうるうるさせて水際を見つめた。好々爺の表情ではない。これが陸地山の怒りの表情だと言うことを水際は知っているので、思わず首をすくめる。

「オジョジョコも知らずに卒業する気だったのかねきみはええ？」

灰白色の口髭に覆われた陸地山の唇から白く粘っこい唾液が散弾のように水際に襲いかかる。思わず手を上げて陸地山の口撃を防ぐ水際。彼の顔面の貞操は守られたが、大事な同人誌はべとべとになっている。

「何するんですか先生。この本いくらすると思ってるんですか？」

「知らん。くだらん漫画など興味はない」

「ネットオークションで十五万も出して買ったんですよ？ どれだけ僕がメシも食わず工事現場でバイトしたか。おかげで十二キロも痩せて、こんなに筋肉がついたんですよ？」

裾をロールアップしたエドウィンのブルージーンズのポケットから、消費者金融のポケットティッシュを取りだして、同人誌を丁寧にぬぐいながら彼は言った。

陸地山は眉を直線に戻し、コットンのシャツに包まれた水際の肩に手を置いた。

「ふん。やはりいい体をしている」

水際は慌てた。思わず同人誌を取り落とす。

「そういう趣味だったんですか」

「勘違いするな」

「だったら僕の胸を触らないでください」

水際は右手で同人誌を大事に抱え込みながら、左手で邪険に陸地山の手を払いのけようとした。だが水際の予想に反して、陸地山の両腕は重く、力強かった。

「私は柔道四段だ」陸地山が不適に笑う。

水際は今度こそ身の危険を感じた。なりこそおたくだが、現場で鍛えた腕力には自信があったのだ。それがこの白髪の老人の腕一本払えないとは。

「これは取引だ。君は単位が欲しい。私は多少頭が足りなくても若くて体力のある男手が欲しい。今日から3週間、君の力を貸して欲しい。そうすれば君の卒業は保証しよう」陸地山は水際の固い胸板を掌底で軽く突いた。水際の息が詰まる。

「げほげほ。なにするんですか」

「私と一緒にオジョジョコを探しに行くんだ」陸地山はにんまり笑った。唇の間から煙草の脂で黄色くなった歯が覗いた。

「そのオジョジョコってというのは何なんですか」

「本当にオジョジョコを知らんのかね」

「見たことも聞いたこともありません」

「見たことがないのは当たり前だ。私だって見たことはないのだからな。しかし名前くらい知っていてもいいはずだがな」陸地山は、全く最近の...とお約束の言葉を続けそうになるのを自制した。

「そのオコジョョを見つけてどうするんです。煮て焼いて食うんですか」

「馬鹿者。君だっていやしくも学生だろう。知的好奇心が働かんのかね。それにオコジョではない。オジョジョコだ」陸地山は憤然と煙を吐き出していった。

「オコジョでもオジョジョコでも僕には関係ありません」水際は煙を払いながら言った。

「単位が欲しくはないのかね」

「もちろん欲しいです」

「ではまずこれを読んでオジョジョコについての基礎的な知識を身につけるのだ」陸地山は一冊の黄ばんだ書物を机から取り上げ、水際に渡した。タイトルには『謎の生物オジョジョコ—その文献的研究』とある。著者は陸地山宗義。裏表紙にはにんまり笑った白髪交じりの好々爺の顔写真。

「私の父の書いたものだ」水際の機先を制して陸地山は言った。

「明日から必要な物を準備する。出発は3日後だ」

「出発」水際はまた頓狂な声を挙げた。

「そうだ」

「もしかして僕も行くんですか」

「何を今更」

「無理です。週末にはコミケがあるし、それまでにバイトも」

「取引だと言ったろう。それとも留年するかね」

「足元を見ないでくださいよ」水際はたくましい体に似合わずべそをかいている。

「問答無用だ」陸地山は水際を見据えて言った。

「で、一体どこへ行くんです」

「北アルプスだ」陸地山は水際に背中を向けて言った。